第十一講　認識論・哲学論（前編）

〝共同化された知覚世界〟をもつことのできる個体とは、他の個体から何かを学び、その学んだものを他の個体と分かち合うような個体である。トンボやカブト虫や金魚や鳩（はと）や鼠（ねずみ）は、他の個体とそのような関係をもつことができない。しかし、私たちはそれができる。私たちは、自分たちの知覚している世界が、他者にもまた同様に開かれており、その世界の中で生じるさまざまな事象を他者と分かち合うことができると考えている。また、自己に体験できることは、基本的に他者にも体験できると考えている。私たちとトンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠との相違は、次のように言うこともできる。私たちは、自己と他者とを基本的に同型的な存在であり、自己と他者とは共通世界をもっており、自己の世界に対する関係と他者の世界に対する関係とは基本的に同じであると考えている。自己と他者とをこのように組織化していることが私たちの特徴であり、そのことが〝共同化された知覚世界〟を可能にしているのだと考えられる。これに対して、トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠は、そのように自己と他者とを組織化していない。彼らには、〝共同化された知覚世界〟を可能にするような、自己と他者についての認識が存在していないと言えよう。かくして、彼らは〝共同化された知覚世界〟をもちえないのである。

　結局、〝共同化された知覚世界〟をもつことができるのは、A〝共同化された知覚世界〟を挟んで成立するような〝自己〟と〝他者〟を創（つく）り出しうる存在であるということになる。これは、「Aをもつことができるのは、AをもつことができるBである」と語っているに等しい。それはトートロジー（注1）である。しかしだからと言って、述べてきたことが無意味だというわけではない。このトートロジーは、〝共同化された世界〟と〝自己〟と〝他者〟という三つの項が、互いに独立ではなく依存しあった概念であることを物語っているのである。〝共同化された知覚世界〟というターム（注2）は、世界を共有し合うような関係性にある二つの項、つまり共通世界を軸にシンメトリー（注3）な構造をもつ二つの項として自己と他者とを組織化できる者の存在を前提にしている。そのように自己と他者とを組織化した者が存在しないことには、〝共同化された知覚世界〟は成立しようにも成立することができない。逆に、自己と他者とは基本的に同じようなものであり他者もまた自己と同様な知覚世界をもちうるのだというように、〝自己〟と〝他者〟とを組織化できた者が存在するならば、当然の帰結として〝共同化された知覚世界〟が成立しうることになる。

具体的な例を考えてみることによって、〝共同化された知覚世界〟をもちうることと、〝自己〟と〝他者〟とをそのような共通世界を挟んで成立する二項として組織化することとが密接に関連していることを見てみたい。(注4)ロビンソン・クルーソーは一匹の犬と孤島に暮らしていた。誰(だれ)も話し相手のいないロビンソンは、おそらく犬に話しかけたことが数多くあったものと考えられる。ある日、沖の水平線に微(かす)かにマストのようなものが見えたとしよう。海を見つめるロビンソンと犬との間で、次のようなやりとりが想像できる。

ロビンソン「おや、あれは何だ……。おい、見ろ、船だぞ。船だ。」
　　犬「ウーワン」
ロビンソン「おまえにも見えるか。」
（しばらくロビンソンは海を見つめるが、マストはそれ以上大きくならずに水平線に沈んでしまう）
ロビンソン「くそ……いっちまいやがった。」
　　犬「ワン」
ロビンソン「そうか、おまえもイギリスに帰れなくて残念か。」

ロビンソン・クルーソーは人間の中で育ち教育を受けた存在である。彼はすでに〝共同化された知覚世界〟を獲得している。彼の知覚は〝共同化された知覚〟である。沖に発見した船のマストを、ロビンソンは（現実には不在の）他者と共に見つめるのである。彼は他者がそのマストを知覚しうることを知っている。だから、マストが見えることに力強く同意し、マストが見えたという喜びを共有してくれる他者が側(そば)にいてくれることを希求するのである。かくして、彼は、側にいる犬が彼と〝共同化された知覚世界〟を分かち合うことはできないことを半ば承知しつつ、犬を他者に見立てるのである。犬にできることは高々そのようなロビンソンの気分を彼と分かち合うことだけである（もちろん、これは犬のすばらしい能力である）。犬には、ロビンソンと〝共同化された知覚世界〟を分かち合う能力がない。犬には、ロビンソンという〝他者〟の体験世界を分かち合おうとするような〝自己〟が全面的に欠けているのである。にもかかわらず、ロビンソンは犬に語りかけ、目の前に生じた出来事の知覚を共有し、その切なく苦しい体験を分かち合ってもらおうとするのである（ありがたいことには、犬はそのような主人の気分に共鳴してくれる）。ロビンソンの〝自己〟は、知覚を共有し合い体験を分かち合うような〝他者〟なしには片時も存続しえないかの

ようである。もし犬がいなければ、ロビンソンは、おそらく自分の一面を〝他者〟とみなし、自分自身に語りかけただろう。しかし、犬は決して一人でそのような会話を行うことはない。このような意味において、〝共同化された知覚世界〟をもつことは、そのような世界を共有し合うような〝自己〟と〝他者〟とをもつことであると言えよう。

（麻生武（あさおたけし）『身ぶりからことばへ　赤ちゃんにみる私たちの起源』）

（注）１　トートロジー――同じ意味内容の繰り返しのこと。
２　ターム――用語。
３　シンメトリーな――対称的な。
４　ロビンソン・クルーソー――一七一九年に刊行されたデフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』の主人公。

問１　傍線部Ａ「〝共同化された知覚世界〟を挟んで成立するような〝自己〟と〝他者〟」における〝自己〟と〝他者〟の関係性はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

① 〝自己〟と〝他者〟とは、それぞれが独自の知覚世界をもつという意味で、対立的な関係となっている。
② 〝自己〟と〝他者〟とは、まったく同一の知覚世界をもつという点で、一体的な関係となっている。
③ 〝自己〟と〝他者〟とは、補完的に知覚世界を構成するところから、相互に依存しあう関係となっている。
④ 〝自己〟と〝他者〟とは、互いに同様な知覚世界をもつとともに、シンメトリーな関係となっている。
⑤ 〝自己〟と〝他者〟とは、同型的な知覚世界の組織化が可能でありながら、互いに独立した関係となっている。

問２　ロビンソン・クルーソーと犬の例で、「犬」は筆者によってどのような存在としてとらえられているか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

① 語りかけられてはいるが結局は世界を共有しあえないので、〝自己〟と〝他者〟が本質的に異なっていることを示唆する存在としてとらえられている。
② ロビンソンが分かち合いたいと考えている気分に共鳴することによって、彼の孤独をやわらげる〝他者〟としてとらえ

られている。

③　喜びを共有する〝他者〟がほしいというロビンソンの希求を受け止めて、マストが見えたという喜びをともに分かち合う相手としてとらえられている。

④　語りかけに反応する〝他者〟の役割を果たすことによって、ロビンソンの〝自己〟を存続させるための存在としてとらえられている。

⑤　実際には存在しない〝他者〟の代わりとして語りかけられる相手にはなっているものの、〝自己〟をもたないので、〝他者〟とはなりえないものとしてとらえられている。

問３　傍線部Ｂの「だろう」の用法の説明として最も適当なものを、次から選べ。

①　筆者の考えを断定的になりすぎないようにやわらげている。

②　筆者の意見を読者に強く訴えかけ確認を促している。

③　ある条件の下で起こりうる可能性を示している。

④　未来に起こることがらを推量として表している。

⑤　特に強調したい部分を文脈から浮き立たせている。

第十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　麻生武＝あさお　たけし（一九四九〜）京都大学理学部数学科と教育学部心理学科を卒業。大阪市立大大学院へ進み、現在、奈良女子大教授。専攻は、発達心理学

●ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』で知られる、十七〜十八世紀のイギリスの小説家。航海と無人島でのサバイバルの話はあまりに有名。続編があり、こちらはユーラシア大陸横断の冒険

語句

個体＝こたい↓個々の生き物・個人
組織化＝そしきか↓まとめる・体系としてまとめて考える
概念＝がいねん↓ことば、とくに抽象語
高々＝たかだか↓せいぜい
片時＝かたとき↓わずかな時間・寸時・いっとき
示唆＝しさ↓それとなく教え示す
補完的＝ほかんてき↓足りない点をおぎなうこと

復習問題　第十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）この知カクされた世界を分かち合う　①覚　②確　③画　④角　⑤拡
（イ）相互にイ存する関係にある　①衣　②依　③意　④威　⑤易
（ウ）絶海のコ島に漂着する　①個　②小　③孤　④湖　⑤子
（エ）自己と他者の二コウの相補的関係　①講　②項　③考　④効　⑤校
（オ）犬との会話の場面をソウ像する　①相　②創　③草　④総　⑤想
（カ）実際的で有益な知識をカク得する　①覚　②確　③獲　④穫　⑤核
（キ）平和の実現を強くキ求する　①気　②期　③機　④希　⑤企
（ク）この書物の見解には共メイできる　①銘　②明　③鳴　④迷　⑤命
（ケ）あなたと私でこの空間を共ユウする　①優　②有　③遊　④裕　⑤雄
（コ）カタ時も君を忘れたことはない　①型　②片　③肩　④形　⑤潟

第十一講　認識論・哲学論（前編）

《本文の対比構造》

主役＝「私たち」人間

〝共同化された知覚世界〟をもてる

〝共同化された知覚世界〟を挟んで

〝自己〟と〝他者〟を同型的な存在と考えられる

主な対比

比較相手＝

トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠

ロビンソン・クルーソーの「犬」

〝共同化された知覚世界〟を

もてない

〝自己〟や〝他者〟になりえない

気分への共鳴のみ

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

〝共同化された知覚世界〟は、教室とか黒板に置き換えるとわかりやすいです。黒板に対面しつつ自分も周りの同級生も大体、わかり合えている、授業が成り立つというイメージです。これが〝共同化された知覚世界〟を挟んで〝自己〟と〝他者〟がシンメトリー（左右対称）な関係にあるということです。教室の右半分の生徒も左半分の生徒も、黒板上でなされている説明がほぼ共通にわかるということです。だから、教室で教えたり教えられたりすることができるのです。もちろん、試験をすれば、得点にばらつきは出ます。全員がまったく同一とはいきません。それでもほぼ共通理解は得られる。この受験サプリだってそう。映像やこのテキストが〝共同化された知覚世界〟です。東日本の方々も西日本の方々も、この授業がわかるはずという共通前提でやっているわけですよ。先生も生徒も、私もみなさんも、この〈教え教えられる〉空間をともに作っている。こうした意味で「依存」しあっているのです。けっしてノートや消しゴムやマーカーを貸し借りし合ったりしているから「依存」ではありませんからね（私は中学生のころ、忘れ物チャンピオンなどと呼ばれ、よくいろいろなものを借りて助けてもらいましたけど）。こうした授業という〝共同化された知覚世界〟が成り立つのは人間だけです。〈メダカの学校〉があるじゃないかという声が上がるかもしれませんが、それは歌だから！　というわけで、正解は④です。①は「それぞれが独自」「対立的」が、⑤は「互いに独立」が×です。記述に反する誤りです。正しくは「互いに独立ではなく依存しあった」ですからね。かといって③の「補完的に知覚世界を構成するところから、相互に依存しあう」は×です。足りないものを「補完」しあう、つまりノートや消しゴムやマーカーの貸し借りレベルの「依存」になってしまいました。こういう間違いを文脈喪失の誤りというのです。「依存」だから〈欠落部分の補い合い、助け合いだ〉と勝手に判断した間違いです。罠にはまらないでね。②は「まったく同一」が言い過ぎ！　不当な全称判断です。正しくは「同様」「基本的に同型的」「基本的に同じようなもの」です。

問２《内容理解・選択肢》

「犬」は、対比相手の方、人間ならぬ「トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠」のグループです。人間の「気分（喜んでいるとか落ち込んでいるとか）」を分かち合うことはできても、人間同士のように、〈教え教えられるような関係〉をもてません。〈先生

イヌ〉が教鞭をとり、〈生徒イヌＡ〉と〈生徒イヌＢ〉が、ほぼ同じ了解に達するようなことはありませんし、そもそもそのような〝共同化された知覚世界〟としての〈犬の学校〉が成立しません。あるいは、人間の高校の教室に、近所の犬がちょろちょろっと迷い込んできたという場面を想像してもよいです。犬が黒板の方を向いてちょこんとすわったとしましょう。その場合でも、黒板で展開されている代数の講義や古典文法の授業内容を、他の人間たちと同様に理解しあえるということはありません。教室内の雰囲気、熱気なり、どんよりなりに反応、共鳴することはあっても、授業内容について相互了解が成り立つということはありません。そのような〈教え教えられる〉了解が成り立つのが、本文でいう〝自己〟〝他者〟で、ほかならぬ人間のことなのです。したがって、⑤が正解です。①は「世界を共有しあえない」はよいのですが、「〝自己〟と〝他者〟が本質的に異なっている」が×です。正しくは、人間と犬は本質的に異なっている、とするべきでした。記述に反する誤りです。また〝自己〟と〝他者〟は「基本的に同型」ということから言えば、両者を「異なっている」としたのは、同質性分断の誤りですね。②は「気分に共鳴する」はＯＫですが、「〝他者〟としてとらえられている」が×です。繰り返し言いますが、〝自己〟とか〝他者〟といえるのは、〈教え教えられる〉関係、〝共同化された知覚世界〟を分かち合える人間同士だけです。したがって、人間の役割を果たしているかのようなこの選択肢は、対比混乱の誤りです。④の「〝他者〟の役割を果たす」もまったく同じ間違い、対比混乱の誤りです。③は「マストが見えたという喜びをともに分かち合う相手」が×です。「喜び」だけならＯＫですが、「マストが見えたという喜び」はマズイです。水平線にかすかに見える白い三角形が「船のマスト」とわかるのは、教育を受けた人間だけです。したがって、これも対比混乱の誤りになります。こうして見てくると間違いの選択肢がどうやって作られているのか、わかりますよね。そうです。こんなことがわかるのが僕たち人間なのです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「もし犬がいなければ」という仮定的な条件を出しているのが、決定的な根拠です。「おそらく自分の一面を〝他者〟とみなし、自分自身に語りかけた」は、その場合ありえるオプションを示している感じです（ちなみにトム・ハンクスが飛行機事故で無人島に流されたり漂流したりする映画『キャスト・アウェイ』では一緒に漂着したバレーボールのボールに話しかけていました。「ウィルソン！」って。他にもヤシの実に顔を彫って呼びかけたり）。別な言い換えを出せば、〈もしスタディサプリでしっかり

勉強して入試にいどめば、合格するだろう〉という感じです。仮にある条件を満たせば、こんな可能性があるよということ。英語でも「if」は単に未来形を示すばかりではなく、「可能性」を意味することがあります。正解は③です。

模範解答

問１＝④　問２＝⑤　問３＝③

復習問題　解答　第十一講

（ア）①　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）⑤

（カ）③　（キ）④　（ク）③　（ケ）②　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）知覚　（イ）依存　（ウ）孤島　（エ）二項　（オ）想像

（カ）獲得　（キ）希求　（ク）共鳴　（ケ）共有　（コ）片時